

愛の完成—*Death of a Naturalist* の 恋愛詩群における完成のイメージ

宮 沖 宏

Seamus Heaney の第一詩集 *Death of a Naturalist* は内容上、4つのグループに大きく分けることができ、まず第1は少年時代の体験を描いたもの、第2に現在のアイルランドの社会や自然界の描写、第3に恋愛詩、最後に芸術をテーマにした詩群である¹⁾。この恋愛詩群については、その中のいくつかの詩、例えば、“Lovers on Aran” や “Poem” などについては単独で採り上げられて論じられたり、言及されたりすることはあるが、恋愛詩全体を取り上げて分析したものはほとんどないのが現状である。

本論では、この詩集中の7篇の恋愛詩それぞれにおける内容と意義とを考察するものである。このために、まず恋愛詩群における、恋人たちの関係を描いているイメージの用い方の分析を行い、このイメージを通して詩人が何を表現しようとしているのかを考察し、最終的にこの詩集中の恋愛詩群全体の位置づけについて明らかにしたい。

1. 鳥のイメージ

恋愛詩群中の最初の詩 “Twice Shy” においては、まだ恋愛が始まったばかりの二人の微妙な距離感、相手に近づきたいが同時に性急さのために恋が破れることを恐れるアンビヴァレントな気持ちが表現されている詩である。この詩においては、この二人の微妙な関係を鷹と鶇という鳥のイメージを通して表現している。

ブリジット・バルドー風にスカーフを巻いた彼女が、夕暮れ時に彼に会いに

来て、二人は川の土手を散歩する、という状況説明の第1スタンザに続いて、第2スタンザで二人の緊張した様子が周囲の静けさの描写を通して示され、さらに第3スタンザでこの緊張状態が鳥のイメージを用いて描かれる。

Traffic holding its breath,
 Sky a tense diaphragm:
 Dusk hung like a blackcloth
 That shook where a swan swam,
 Tremulous as a hawk
 Hanging deadly, calm.

A vacuum of need
 Collapsed each hunting heart
 But tremulously we held
 As hawk and prey apart,
 Preserved classic decorum,
 Deployed our talk with art.

周囲の往来はまるで息を潜めるかのように途絶え、夕空も緊張を孕んで静まり返っている。しかし、実は「息を潜めている」(“holding its breath”)のは「往来」(“Traffic”)なのではなく恋人たちであり、また、咳やしゃっくりもできないほど「横隔膜が緊張している」(“a tense diaphragm”)のもまた「夕空」(“Sky”)ではなく恋人たちなのである。つまり、付き合い始めて間もない恋人たちの緊張した精神状態が周囲の環境に投影されて表現されているのである。接近するための必然性が見つからないこと(“A vacuum of need”)が、つまり相手に近づくためのもっともらしい口実や手管が見出せないことが、相手を求める気持ちを押しつぶしてしまう(“Collapsed each hunting heart”)。ここ

で二人の間の、近づきたいという欲望と、近づけば嫌われるのではないかという不安との入り混じった葛藤した精神状態が、「鷹」とその「餌食となる小鳥」という鳥のイメージを通して描かれる。

村田・坂本・杉野・薬師川が、この詩は“Twice Shy”というタイトルが Marvell の“To His Coy Mistress”を連想させ、詩中の“Mushroom loves”という語句が Marvell の同じ詩の中の“My vegetable love”を連想させると指摘している通り (745)、確かに Marvell のエコーが感じられるが、鳥のイメージに限って言えば、むしろ Donne の“The Canonization”における eagle と dove を想起させられる。

And we in us find the eagle and the dove.

The phoenix riddle has more wit

By us: we two being one, are it.

上の“The Canonization”からの引用において、eagle は力や強さなど男性的要素を、dove は美や優しさなどの女性的要素を示しており、愛し合う男女はひとつの完全な世界であり、いわば男性と女性が共存し、それぞれの性を超越した phoenix であることが表現されている。A. J. Smith は 16 世紀において、愛の模範的完成は両性具有として考えられていた背景を指摘しており (361)、Donne の“The Canonization”においては、eagle と dove という対極的要素を示す鳥同士がひとつに共存する phoenix の姿で愛の完成を示しているのであるが、Heaney の場合はどうであろうか。

“Twice Shy”の最終スタンザにおいて、二人の関係が再び鳥のイメージを通して描かれる。

So chary and excited

As a thrush linked on a hawk,

We thrilled to the March twilight
 With nervous childish talk:
 Still waters running deep
 Along the embankment walk.

ここで興味深いのは、同詩からの先程の引用と同じように、鷹と鶇の関係が描かれているが、男女のどちらが鷹で、どちらが鶇なのかは明確にはされていない点である。二人が、共に分かちがたくつながれた鷹と鶇（“a thrush liked on a hawk”）であり、「興奮しながらも用心深く」（“chary and excited”）会話を続けるのである。どちらが鷹で、どちらが鶇というよりも、どちらもが鷹であり、鶇であるのだ。この点では、狩るものと狩られるもの、男性的要素と女性的要素が共存しているといえよう。

しかし、後年の作品である、*Seeing Things* (1991) 中の詩“A Royal Prospect”で描かれる、二人が恐らくハネムーン中に訪れた Thames 川での船遊びの回想シーンでも、“Twice Shy”と同様に、二人の微妙な距離感が鳥のイメージを用いて表現されている。

On the day of their excursion up the Thames
 To Hampton Court, they were nearly sunstruck.
 She with her neck bared in page-boy cut,
 He all dreamy anyhow, wild for her
 But pretending to be a thousand miles away,
 Studying the boat's wake in the water.
 And here are the photographs. Head to one side,
 In her sleeveless blouse, one bare shoulder high
 And one arm loose, a bird with a dropped wing
 Surprised in cover. He looks at you straight,

Assailable, enarmoured, full of vows,
Young dauphin in the once-upon-a-time.

上の引用において、“wild for her” や “Assailable” といった語句で示されているように、相手に対して執着を示し、能動的なのは「彼」だけであり、「彼女」の方は受動的で、不意に襲われた巣の中の小鳥のイメージで描かれている (“a bird with a dropped wing / Surprised in cover”)。鷹と鶇の関係で言えば、明らかに「彼」は鷹であり、「彼女」は鶇である。この男性が攻撃的で、女性が受動的という、伝統的・保守的・一般的概念こそ Heaney が本来抱いている男女関係の概念であろう。

しかし、第一詩集中の恋愛詩 “Twice Shy” においては、男性的要素と女性的要素の対立の和解・解消をアピールするために、敢えて Heaney が本来抱いている伝統的な概念を抑えて、男性女性のどちらにも限定されない表現法にしたのであろう。だが、男性、女性のいずれが鷹であり、いずれが鶇であるのか限定しないことは良いのであるが、対立する要素の和解・解消まではこの詩の中では描かれていないのである。

この男性的な要素と女性的な要素という対極の和解は “Lovers on Aran” において、海のイメージを用いてもっと見事に表現されることになる。

2. 海のイメージ

Michael Parker は “Gravities” “Valediction” “Lovers on Aran” において、愛がその内に秘めた本質的な力 (“instress”) が芸術や風景と結び付けられて、海のイメージを通して示されている (“the instress of their love communicate itself through sea image”) と指摘しているが (72), Heaney の恋愛詩において海のイメージはただ単に愛の持つ内的な本質的な力を示しているだけではない。

まず海のイメージは相反する2つの要素を示すために用いられている。このことが容易に見て取れるのが、恋愛中の二人の関係を海のイメージを通して描

いた “Valediction” である。

Lady with the frilled blouse
 And simple tartan skirt,
 Since you left the house
 Its emptiness has hurt
 All thought. In your presence
 Time rode easy, anchored
 On a smile; but absence
 Rocked love’s balance, unmoored
 The days. They buck and bound
 Across the calendar,
 Pitched from the quiet sound
 Of your flower-tender
 Voice. Need breaks on my strand;
 You’ve gone, I am at sea.
 Until you resume command,
 Self is in mutiny.

この詩においては、港内の凪いで安定した穏やかな状態と、外海の荒れて混沌とした状態という相反する両極状態が、同じ海について示される。この両者の違いを生み出す原因は彼女の存在の有無である。彼女が傍らに居てくれると、彼女の微笑という錨につながれて (“anchored / On a smile”), 日々は穏やかに過ぎていく (“Time rode easy”) のに対し、彼女が去ってしまうと、日々のもやい綱は解かれてしまい、愛はバランスを失い、日々も荒れ狂うかのように飛び跳ね (“They buck and bound / Across the calendar”), 彼女を求める気持ちが
 大波となって私という岸に叩きつける (“Need breaks on my strand”)。このよ

うに凧と嵐，秩序と混沌という両極が海のイメージを通して描かれているのであるが，しかし，この詩においてはこの対立した要素の和解は示されない。互いに対立するイメージの和解が海のイメージを通して見事に描き出されるのは“Lovers on Aran”においてである。

“Lovers on Aran”においては，タイトルで示される恋人たちの姿は直接描かれるのではなく，大西洋の荒波がアラン島の崖に打ち付ける様子を通して間接的に描かれている。

The timeless waves, bright, sifting, broken glass,
Came dazzling around, into the rocks,
Came glinting, sifting from the Americas

To possess Aran. Or did Aran rush
To throw wide arms of rock around a tide
That yielded with an ebb, with a soft crash?

Did sea define the land or land the sea?
Each drew new meaning from the waves' collision.
Sea broke on land to full identity.

この詩においても海は相反する2つの要素を有している。遙かアメリカから大西洋を渡ってアラン島に押し寄せる波は，アラン島を「我が物にするために」（“to possess Aran”）押し寄せるといふ点では男性的要素を持つが，アラン島にぶつかると，「やさしく砕け，身を任すように弱々しい引き潮となってしまう」（“That yielded with an ebb, with a soft crash”）といふ点では女性的要素を持つ。つまり波は陸にぶつかる前は男性原理として，ぶつかった後は女性原理として描かれている。ここから波が陸にぶつかった瞬間は男性と女性の両性を

共有する瞬間となりうるということが理解できる。

また、両極的な要素を持つのは海だけではない。海が両極的要素を持つのなら、当然陸もまた両極的要素を持つことが予想される。「我が物にするために」押し寄せる波に対して、逃れられないアラン島は「我が物にされる」女性的存在としてまず描かれている。しかし、上の引用において、アラン島は押し寄せる波に対して「波を包み込むように、両手を大きく拡げて迫り」(“rush / To throw with arms of rock around a tide”), 波を屈服させてしまうという点では、男性的に描かれている。つまりアラン島という陸地もまた海と同様に両極的要素を有しているのである。

しかし、この詩において最も重要なのは両極的要素がただ単に共存していることを示していることではない。この両者がぶつかる瞬間こそ、両者の対立が和解解消される瞬間であることを示している点こそが重要なのである。海が陸地を定める(“define”)のでもなく、陸が海を定めるのでもなく、両者がぶつかりあうことによって初めて両者が共に定まり、両者がぶつかりあうことによって新たな意味が生じ(“Each drew new meaning from the wave’s collision”), 両者がひとつの完全な存在になるのである(“Sea broke on land to full identity”)。従って、海が男性で陸が女性なのではなく、また逆に海が女性で陸が男性なのでもなく、その両方が同時成立することこそが完成なのである。この海と陸の関係が、そのまま恋人たち(HeaneyとMarie)に当てはまるのであって、二人がそれぞれの中に持つ男性的要素と女性的要素とが、さらにはその他の互いに対立する要素どうしとが、お互いに損なうことなく、弁証法的に止揚することによって完成に至るといふ愛の完成の姿が描き出されているのである。

3. 家のイメージ

恋愛詩群中の最後の2つの詩, “Scaffolding” “Storm on the Island” においては、完成されていく愛の姿が家という建築物のイメージを通して描かれている。

“Scaffolding”においては、二人の愛の土台が、石大工の建前足場 (“scaffolding”) の比喻を用いて表現される。また、この詩の詩形もしっかりとした足場を示すかのように、2行で1スタンザを構成する整然とした couplet 形式で書かれている。石大工が家を建て始める時に、足場の横板が動かないか、はしごがしっかりとしているか、つなぎ目はしっかりと固定されているかなどと、まず建前足場を注意深く確かめてから作業に取り掛かる。

Masons, when they start upon a building,
Are careful to test out the scaffolding;

Make sure that planks won't slip at busy points,
Secure all ladders, tighten bolted joints.

And yet all this comes down when the job's done,
Showing off walls of sure and solid stone.

しかし、家が建ってしまうと、この足場は取り壊されて (“all this comes down when the job's done”), しっかりとした石造りの壁が浮かび上がる。これと同様に、二人の愛の世界、閉ざされた楽園である「家」が完成すると、愛の出発点となった古い足場は取り壊されてもかまわない。

So if, my dear, there sometimes seem to be
Old bridges breaking between you and me,

Never fear. We may let the scaffolds fall,
Confident that we have built our wall.

上の引用中の“Old bridges”とは、互いに異なる環境に育った他人同士だった恋人たちの間を初めてつないだ架け橋である精神的つながりや共感のことであり、ひょっとしたら単なる表面的で些細なつながりであったのかもしれない。しかし、その脆い架け橋の上に、慎重に愛を育てていくことにより、やがては立派な壁を築き上げ、愛の完成を誇ることができるのである（“Confident that we have built our wall”）。愛が完成したからには、昔の愛の足場はたとえ壊れても気にする必要はないのである。

Henry Hart は、Heaney の描く牧歌的な恋人たちの世界の外には、その中に絶えず侵略しようとしている不可解で恐ろしい運命が存在することを指摘している（29）。この指摘はこの次に採り上げる“Storm on the Island”において、特によく当てはまる。さらに Hart は、上の引用における“Never fear”とは、この外界を気にする意識の表れである、と述べている（29）。しかし、“Never fear”という表現において、“fear”の対象は外界ではなく、“Old bridges”がこわれることであり、「愛の家が完成した以上、二人の古い愛の足場が壊れても心配することは無い」ということを言っているのだから、これにはあたらない。むしろ、外界の圧力に抵抗する「家」のイメージは“Storm on the Island”においてよく描かれている。

“Storm on the Island”では、Aran 島を思わせる、地上に積み藁も樹木もない不毛な島の大地で激しい嵐に襲われる恋人たちの姿が描かれる。

We are prepared: we build our houses squat,
Sink walls in rock and roof them with good slate.
.....
But there are no trees, no natural shelter.
You might think that the sea is company,
Exploding comfortably down on the cliffs,
But no: when it begins, the flung spray hits

The very windows, spits like a tame cat
Turned savage. We just sit tight while wind dives
And strafes invisibly. Space is a salvo,
We are bombarded by the empty air.
Strange, it is a huge nothing that we fear.

いったん嵐が吹き始めると、海はおとなしい猫が凶暴な猫に変わるように(“like a tame cat / Turned savage”), 激しい波しぶきを二人の家に吐きかける。「機銃掃射」(“strafes”)「一斉射撃」(“a salvo”)「爆撃」(“bombarded”)と戦闘用語を用いて、吹き荒れ、家に叩きつけてくる激しい嵐が形容される。この嵐という外界の暴力から恋人たちを守ってくれるのは「家」しかないのである。この不安な状況の中で頼れるのはお互いしかない、という状況は、“Honeymoon Flight”において、ロンドンへのハネムーンの機上、少年だった過去とこれから二人で家庭を築いていく未来との中間の現在という時間、アイルランド島とブリテン島との中間の空中、という時間的にも空間的にも宙ぶらりんの状態の中で乱気流に揺られ、お互いに頼るしかないと自覚する(“Travellers, at this point, can only trust”)状況と似ている。しかし、不安な状況の中で互いに頼るだけでは、愛の完成は未だ十分には成しえない。この十分な愛の完成のイメージは“Poem”において描かれることになるのである。

4. 環のイメージ

Death of a Naturalist 中の7篇の恋愛詩群のうち、最も完成度が高く、最も重要なものは“Poem”であろう。なぜなら7篇中の中心に置かれ、この詩だけに“*For Marie*”と妻に捧げる献辞があり、また後年まとめられることになる選詩集 *Opened Ground* (1998) では、この7篇中の恋愛詩より唯一つ“Poem”だけが選ばれているからである。

Love, I shall perfect for you the child
 Who diligently potters in my brain
 Digging with heavy spade till sods were piled
 Or puddling through muck in a deep drain.

この詩の冒頭では、重たい鋤で畑を掘り、泥の中を掻き分け、畑に種を播く子供の姿が描かれる。村田・坂本・杉野・薬師川はこの「子供」について「この詩の主人公は長男マイケルである」としているが⁵ (745)、外的状況からも内在証拠からもこの解釈は受け入れられない。

まず外的状況であるが、第一子の長男 Michael が誕生したのは1966年7月であるのに対して、この詩が収められた処女詩集 *Death of a Naturalist* が出版されたのは同年5月である。つまり Michael 誕生よりもずっと前にこの詩が書かれていたことは明白である。さらに、Corcoranによれば、1965年1月にFaber社から処女詩集出版の打診があり、Faber社に送った原稿が1冊分には不足しているので、数ヶ月の間にたくさん書き、その後で Marie と1965年8月に結婚し、ロンドンへのハネムーンに飛び立つのであるが、その時までにはFaber社より原稿を受け取ったとの返事をもらっている (246。See also Parker 58)。つまり1965年8月以前に、“Poem”を含む原稿がFaber社に送られており、長男 Michael 誕生の11ヶ月以上前にこの詩が書かれていたことになり、この時点では Marie は妊娠さえしていないことになる。

次に内在証拠であるが、「私の頭の中で歩く子供」とは、Heaneyの記憶の中にある農作業をする自分自身の少年時代の姿である。このことを明らかにするのは第2スタンザであり、この中で自分の少年時代が詳しく描かれる。

Yearly I would sow my yard-long garden.
 I'd strip a layer of sods to build the wall
 That was to exclude sow and pecking hen.

Yearly, admitting these, the sods would fall.

Or in the sucking clabber I would splash
 Delightedly and dam the flowing drain,
 But always my bastions of clay and mush
 Would burst before the rising autumn rain.

少年は毎年毎年庭に種を播き，土を削っては壁を作り，豚や鶏がせっかく播いた種を食べないようにする（“to exclude sow and pecking hen”）。この土地を削る作業は，詩集の巻頭詩 “Digging” における，祖父から父そして自分へとつながる「掘る」行為と結びつく。つまりこの詩集全体が Heaney の少年から大人に至る精神的自叙伝を形成する構成になっているのであるから，この詩中の “child” は成長過程の Heaney の姿に他ならない。

この詩の冒頭においては，この “child” を完成するのは「私」であると述べている（“Love, I shall perfect for you the child”）が，ひとりの力だけでは完成はなしえないのである。Donne の “Valediction: Forbidding Mourning” における有名なコンパスの比喩と同様に，男性一人だけでは愛の円環は完成しないのである。

Love, you shall perfect for me this child
 Whose small imperfect limits would keep breaking:
 Within new limits now, arrange the world
 Within our walls, within our golden ring.

従って，上の引用にあるように，この詩の最終スタンザでは，「君」が “this child” を完成させてくれれば（“Love, you shall perfect for me this child”），「私」と「君」の力の相互作用で初めて愛が完成するのである。つまり Heaney と Marie，男

性と女性，という対立する両極がぶつかりあい止揚することによって，初めて「黄金の環」（“our golden ring”）が完成するのである。ここで「黄金の環」は二人の「結婚指輪」を示すと同時に，黄金や円環の持つ「完成」のイメージ，さらには円環が持つ「閉ざされた空間」を示す三重の意義を有する。この「閉ざされた空間」は外界の暴力から隔離された世界であり，また二人の愛の世界であり，この中で愛の完成を迎えることができるのである。このように「黄金の円環」は重要な比喩であるが，さらに重要なのはこの円環が静止した固定的な円環ではなく，絶えず拡がり行く動的な円環であることだ。つまり静止した固定的な円環では「小さく不完全な環」（“small imperfect limits”）でしかなく，その限界である外周を絶えず破って，円環を外に拡げていくことで，より大きな世界を完成に導いていくという，絶え間ない精神的成長を理想とする姿を描いていることこそが最も重要なのである。この絶えず拡がる円環によって初めて，少年時代の過去と，恋愛が成就した現在と，詩人として自立していく未来とがつながり，Heaneyの求める完成へとどこまでも近づいていけるのである。

結 論

Death of a Naturalist において，Heaneyは自分と，やがて妻となるMarieとの関係を一連の恋愛詩で描き出すのに，鳥・海・家・環のイメージを用いている。まず鳥のイメージでは，“Twice Shy”において，二人の間の微妙な距離感と緊張感とを鷹と鶇の関係で描き，しかも男女のいずれが鷹または鶇なのか意図的にあいまいにすることによって，男女のいずれもが鷹であり，鶇である対等の力関係を表現している。海のイメージについては，“Lovers on Aran”において，波の叩きつけるように押し寄せる男性的な側面と，弱々しく引き下がる女性的な側面の両面を描き，男性的要素と女性的要素の共存を表現している。さらには海と陸との両者が共存して，初めて完全なひとつの存在になれるという重要な観念が示される。Elmer Andrewsは，Heaneyの詩には互いに対立する要素が共存することを指摘した上で，「Heaneyの詩はこれら対立する要素を和

解させようとする試みである」(“Heaney’s poetry is an attempt at reconciling opposites”)と述べている(157)。しかし、Heaneyの恋愛詩群においては、ただ単に対立する要素を和解させるだけでなく、対立する要素が互いに損なうことなく共存し、両者がぶつかりあい止揚することによって、愛の完成に至ることが示されているのである。家のイメージについては、“Scaffolding”“Storm on the Island”において二人の世界が建築物のイメージを用いて示され、前者においては完成した家においてはかつての愛の足場が不要となるという自信が示され、後者においては外界の暴力から守る存在としての機能が描かれる。環のイメージについては、“Poem”において、二人の愛の完成が *golden ring* の比喩を用いて示され、閉ざされた世界における完成の姿と同時に、絶えず拡がり行く環のイメージで、絶え間ない自己成長を通して、完成に至る姿が提示される。

では最後に *Death of a Naturalist* における恋愛詩群全体の位置づけはどのようなのであろうか。この詩集全体が内容面から4つのグループに大別され、詩集全体で、innocentな少年の比喩的な死から、対立する要素の共存する周囲の状況への目覚め、恋愛を通しての成長、芸術への目覚めと自立というように、Heaney自身のいわば精神的自叙伝を形成しているのである。この一連の精神的成長過程の中で、恋愛という人生に密着したテーマの詩群と、芸術という人生を抽象したテーマの詩群とをまとめて併置することにより、人生と芸術の共存を意図したのであろう。この人生と芸術の共存という考えは、Heaneyにとっては重要であり、その証拠に彼のエッセイでは、「人生と芸術のいずれを選ぶべきか」をテーマにしたYeatsの詩“The Choice”を引用し、Yeatsにおいては最終的に人生と芸術(作品)が分離せずに連続したものであることを賞賛している(*Preoccupations* 100)。Heaneyにとっては、男性的要素と女性的要素という互いに対立する存在のどちらもが共存することが恋愛詩における完成の条件であったのと同様に、人生と芸術も排斥しあうことなく共存してこそ初めて自分の目指す理想に、人生の完成に近づけるのである。

註

- 1) 拙論「若き詩人の肖像—*Death of a Naturalist* における理想の詩と詩人像の追求」(『松山大学論集第16巻第6号』) 参照。

Works Cited

Primary Sources

- Heaney, Seamus. *Death of a Naturalist*. London: Faber and Faber, 1966.
 ---. *Seeing Things*. London: Faber and Faber, 1991.
 ---. *Preoccupations: Selected Prose 1968-1978*. London: Faber and Faber, 1980.

Secondary Sources

- Andrews, Elmer, ed. *The Poetry of Seamus Heaney: A Reader's Guide to Essential Criticism*. Icon Books, 1998. New York: Palgrave Macmillan, 1998.
 Corcoran, Neil. *The Poetry of Seamus Heaney: A Critical Study*. London: Faber and Faber, 1998.
 Hart, Henry. *Seamus Heaney: Poetry of Contrary Progressions*. Syracuse, New York: Syracuse University Press, 1992.
 村田辰夫, 坂本完春, 杉野徹, 薬師川虹一。『シェイマス・ヒーニー全詩集1966~1991』。東京: 国文社, 1995。
 Parker, Michael. *Seamus Heaney: The Making of the Poet*. London: Macmillan, 1993.
 Smith, A. J., ed. *John Donne: The Complete English Poems*. London: Penguin Books, 1971.